

【作品について】

ギツシングの祖父は労働者階級の靴職人だった。それゆえ、彼の父親が薬剤師として地方の典型的な下層中産階級の人間になれたのは、たゆまぬ努力による独学と自助の精神のおかげである。この父親は秀才だったギツシング少年に高等教育を通して上の階層まで出世させたかったが、息子が十三歳の時に亡くなってしまった。それ以後、ギツシングは常に貧困に苦しめられ、街の女のために犯した罪で高等教育から締め出され、アメリカを放浪した後にロンドンへ出て作家となってからも、スラム街に近い安い下宿で生活せざるを得なかった。しかし、そうした生活によってギツシングは労働者階級の貧民たちの惨状を冷徹な眼で観察できるようになり、その実体験は彼の初期作品群における自然主義的な描写に大きく貢献した。このような描写は人生や生活の暗い面を暴き出すために娯楽性に欠け、ギツシングが敬愛した先輩作家であるディケンズのユーモアや笑いにあふれた小説とは違って作品の売れ行きにつながらず、結果的に彼の貧困生活を長引かせることになった。

一般に、ギツシングはヴィクトリア朝後期の自然主義作家で、その小説は悲観主義や運命論に支配された陰鬱な色調の作品ばかりだと思われる。しかし、『チャールズ・ディケンズ論——批評研究』（一八九八）やロチェスター版ディケンズ全集の各作品に寄せた序文からな

る『不滅のディケンズ』（一九二五）を著したギッシングは、どの小説にも喜劇的息抜きとしてディケンズの笑いやユーモアをちりばめている。ギッシング研究の泰斗であるピエール・クステイヤスは、評伝（*The Heroic Life of George Gissing*, Pickering, 2011-12）の中で、「基本的にギッシングは楽天家で理想主義者である。若い頃の生活で心が荒廃し、四十歳の頃には誰よりも厳しい運命の処遇を受けて幻滅を味わったが、暗黒時代においても生きる意欲を完全に失うことはなかった。一知半解の批評家たちは彼の小説の陰鬱性を得々と語っているが、作品の全部が一様に陰気臭いというわけではない」と喝破している。アメリカに逃避した若かりし頃のギッシングが書いた短篇の中には、悲観的な要素がなく、主人公の勘違いや軽挙妄動などによる喜劇的な作品が少なくない。彼は最初から自然主義作家だったわけではないのである。中期の『下宿人』や『都会のセールスマン』、後期の『命の冠』や『我らが大風呂敷の友』や『ウィル・ウォーバートン』を読んで、読者が暗澹たる気持ちになることは決してない。

今回ここに訳出した『下宿人』は、一八四八年設立で九〇年代に国際的な出版社となっていたロンドンのカッセル社のために、九五年三月二八日に小説家・出版者のペンバートン（Max Pemberton, 1863-1950）がギッシングに執筆を依頼した中篇小説である。その年の秋に原稿を渡す約束がなされ、七月初めにはタイトルも決まって、途中で何度か中断したものの、わずか二週間で書き上げられた。出版社も非常に満足した『下宿人』は、ギッシング作品の中でもっとも喜劇的な色彩の濃い小説である。

* * * * *

『下宿人』の舞台はロンドン郊外のサットンである。初期作品群の最後の小説『ネザー・ワールド』を脱稿したギッシングは、一八八八年九月末に少年時代からの憧憬の地であったイタリアへ、そして翌年一月には自分の教育の基礎工事を仕上げるためにギリシャへの旅に出た。多くの批評家が指摘するように、ギッシングがロンドンを離れた二回の大陸旅行は、彼の関心が労働者階級から中産階級へ移ったという点で、彼の生涯における大きな転換点となっている。一八八〇年代の初期作品群は、その大半が労働者階級の悲惨な生活に焦点を当てたものだったので、このようなロンドンから温暖な気候の地中海方面への脱出は、彼の気持ちを楽観的、審美的にしたようである。

『ネザー・ワールド』の舞台はロンドンの中心に近いクラークンウェルのスラム街であったが、そこから五年後の一八九四年に出版された『女王即位五十年祭の年に』では、舞台が南ロンドンの郊外キャンパーウエルに移っている。それは、労働者階級の生産に重きが置かれたロンドン内部の地区から、キャンパーウエルのブリクストンにおける中産階級の消費に焦点が当てられた地区への移動であった。貴族や大地主といった上流階級の人々がカントリー・ハウスと呼ばれる広大な屋敷を構えた田舎と違い、かつての郊外は都市生活のもっとも墮落した部分（賤業者や犯罪者）を遠ざけるための場所であった。昔の都市警察には原始的な監視能力しかなか

ったので、郊外が無法地帯になっていたことは想像にかたくない。このような郊外は十八世紀以降にロンドンの実業家や経営者の別荘地となり、産業革命後は激増したロンドンの労働者たちと距離を置き、自分の富を物理的に認識したい新興の中産階級の人々が移り住む理想の場所となった。キャンパーウエルは、十八世紀末には人家がまばらな寒村にすぎなかったが、百年後には人口が約二五万となり、ロンドンの中産階級が新たに住むための郊外の縮図と見なされるようになっていた。そうした郊外のスプロール現象は一八六〇年代から急速に拡大して八〇年代にピークを迎えている。郊外 (qinqns) は「都会 (qm)」に「上位の (superi)」とは反対の「下位の (sni)」という接頭辞が付いた言葉である。『オックスフォード英語辞典』によれば、その形容詞 (suburban) の定義の一つは「郊外の住民の特性として、あまり良くない礼儀作法を有する」というネガティブなものになっている。それは「虎を画きて狗に類す」ような下層中産階級に対する上の階級から見た揶揄や嘲笑の言葉である。『下宿人』でもマムフォード夫人のような「郊外に住む中流家庭の奥さまであれば、誰でも自慢するような応接室」について「安ピカ物が横行する今の時代、当世風の家具調度品を備える場合の費用が少なくてすむ」(第九章)点を強調しているギッシングは、明らかに上の階級からの視線で下層中産階級を諷刺的に描いている。

ギッシングは、二回目の大陸旅行から戻った一年後、一八九一年一月にロンドンの喧騒から逃れてデヴォン州のエクセターへ引っ越していたが、九三年六月になるとロンドン郊外のブリ

クストンに移っている。しかしながら、郊外に対する彼の見方はすでに好意的ではなくなっていた。ブリクストンでの生活はロンドン中心部を支配するイデオロギーが郊外にも浸透していることを彼に認識させただけであつた。鉄道網や通信網の発達によって都市の文化や物の考え方が郊外まで伝わっていたからである。英国支配下の平和に支えられた一八五〇年代、六〇年代の「ヴィクトリア朝大好況期」に富裕化して郊外に住み始めた新興の中産階級の人々もまた、ロンドン中心部の労働者階級と同様に物質主義、商業主義、資本主義といった目に見えない強力な社会・政治・経済思想に従属していたのである。

サバービア（郊外生活特有の様式・風俗・習慣）の現実には、ギッシングの処女作『暁の労働者たち』の洗練された知的な女性、ヘレン・ノーマンがロンドン郊外のハイベリーで送るような理想化された半田園的な隠棲生活とは違い、都市に集中する産業的・経済的な発展の重視や精神的な（芸術志向の）生活の軽視に支配されていた。これが『女王即位五十年祭の年に』の中心テーマとして郊外生活の空虚さに焦点が当てられた理由である。その証拠に、キャンパーウエルは世間体にとらわれた中産階級の虚栄と偽善がはびこる郊外として描かれており、とりわけ下層中産階級に対するギッシングの反感が見て取れる。郊外が汚濁の都市から分離されているという考えは自己欺瞞的な虚構にすぎないのだ。翌年に出版された『下宿人』もまた同断である。マムフォード夫妻は郊外に住みながらもロンドン時代の思考から抜け出せず、世間体を最優先する二人の滑稽な姿が揶揄と諷刺を込めて活写されている。

* * * * *

『下宿人』のママフォード氏はロンドン郊外からシティーまで車で通勤している事務員 (office clerk, pen driver/pusher) である。イギリスの事務員は、ロンドン万博が開催された一八五一年に一四万人ほどで、労働人口の四十人に一人にすぎなかったが、六十年後の一九一一年には約七倍の百万人に達していた。その主たる原因は、ヴィクトリア朝後期になると、資本主義経済と国際貿易の発達によって金融・財政が拡大し、交通網と通信網の発達によってビジネスにおける事務作業が激増したことにある。そうした流れの中で、一八七〇年を嚆矢とする一連の初等教育法の恩恵を受け、向上心のある労働者階級の若者たちが事務員となつて下層中産階級に参入していた。ギッシングの短篇小説には、そのような教育のおかげで事務員となった登場人物が少なくない。『下宿人』と同じ一八九五年に出版された「地の塩」(The Salt of the Earth)の主人公トマス・バードは、事務員としての給与はそこそこあるのだが、給料日でも自分が買いたいものを買えないでいる。それは、作品の題名が示すように「堅実で善良な人」(Matt. 5:13)として周囲の人間にいつも金をあげたり貸したりしているからである。彼は郊外のキャンバーウエルに下宿しているが、このように金銭的な余裕がないので遠距離を歩いて通勤している。当時の事務員の多くは、中産階級の人間として世間を気にした体裁のために、黒のスーツなどで外見の維持に努めたり、キャンバーウエル、ブリクストン、クラパムあ

ある類の契約だ」と答えているように、隣人たちの目を意識して見苦しさを糊塗した自己欺瞞的な表現である。当時は同じ中産階級でも上層と下層には埋めがたい径庭があり、このような下層中産階級の人間のリスペクタブルな言動は常に上層中産階級の笑いの対象となっていた。

* * * * *

イギリスでは、産業革命が始まる直前にジョージ三世が即位した一七六〇年から、彼の晩年の発狂によって摂政時代が終わる一八二〇年まで、国王の絶対主義的な圧制に伴う暴力的な社会風潮が支配的であった。この六十年間、産業革命の負の遺産である貧困の結果として犯罪が多発し、その防止のために血の法典によって死刑になる罪状が増した。しかし、摂政時代が終わった頃からナポレオン戦争後の不況は徐々に回復して犯罪も減り、暴力的な社会風潮はやわらいで行った。とはいえ、こうした暴力は実際には抑圧されて表面的に見えなくなったにすぎない。換言すれば、他者に対する抑圧としての暴力は、ヴィクトリア朝を経済的に支えて文化の担い手となった中産階級に関して言えば、彼らの特徴づけるリスペクタビリティという概念に暗示されるように、世間体のために抑圧されたものの、その抑圧によって鬱積した暴力は時と場合によって形を変えて表面化することがあった。『下宿人』のママフォード夫人は、中産階級で理想化された「家庭の天使」としてリスペクタビリティを意識した生活を送っている

が、デリック嬢とその恋人コップが引き起こした火事によって自慢の応接室を破壊された際には、リスベクタビリティを完全に忘れて憤怒の形相になり、労働者階級の人間のように逆上してしまう。ここでギッシングが揶揄しているのは、暴力的な激しい感情の抑圧によって維持されている、そうした下層中産階級のリスベクタビリティの脆弱さに他ならない。

リスベクタビリティが強迫観念化しているのは、中産階級の上層を模倣しようとする下層の人間に限ったことではない。仕事の関係で上の階級との接触が多い労働者階級の上層もまたリスベクタビリティにとらわれていた。お嬢さまの恋人コップは、電灯会社と取引関係がある電気技師であり、熟練労働者として給料も高く、マムフォード家の火事に対してもち、ゃんとした銀行宛ての小切手で弁償できるほど経済的に恵まれている。このように労働者階級の約一割を占めていた、いわゆる「労働貴族」は労働組合や友愛協会の一員であることが多かった。彼らは自助の精神や向上心が強く、無知で不品行な一般の労働者との差異を常に意識し、喜怒哀楽の抑制に努める傾向があつた。お嬢さまは折に触れてコップの暴力性に言及しているが、リスベクタビリティに対する彼の意識が高いのも事実である。実際、彼は「上品そうな道路沿いにあつて、恥ずかしくない地区にあるような家」（第六章）に住もうというデリック嬢の提案に同調している。また、結婚の合意に達した時も、他人が近くにいるという理由で声を落としてゐるし、マムフォード夫人を訪問した際も、相手から誘われる前に握手を求めような、つまり社会的な劣等感をうっかり態度に表わすようなこともしていない。しかし、相手が上の階級

でも気に入らなければ、作者が「次第にイライラし始め、激しい感情がうごめいていることが筋肉の動きを見ても分かった」（第三章）と述べているように、労働者としてのコップのリスペクタビリティに関しても、その薄氷を踏むような脆弱さは常に嘲笑の的になっている。

同じ労働者階級でも、コップより下の階層から一足飛びに中産階級の間人となったデリック嬢の母親、ヒギンズ夫人は「昔は酪農場で働いていた若い美少女だった」（第一章）ように思えると記されている。彼女は、結婚直後に夫のデリックが死んで未亡人となってしまったが、その美貌と野心とで成り上がりのヒギンズ氏と再婚し、現在のような金銭的に何不自由ない生活を送っている。再婚して中産階級に仲間入りした彼女は、夫が兄弟商會を経営していることもあって、マムフォード夫妻より社会的地位が高いと思っている。とはいえ、彼女は労働者階級時代と同じように喜怒哀楽のアクションが大きく、ロンドンなまりのコックニーの特徴である語頭の *h* 音が落ちる言語癖や文法的なミスが改善される見込みはまったくくない。作品中の彼女のリスペクタブルな言動がすべて滑稽で、読者の失笑を買ってしまうゆえんである。

このようなヒギンズ夫人の娘、デリック嬢がマムフォード家に下宿したかった表向きの理由は、感情を制御できない点で自分とよく似た母親や義理の姉と実家で衝突していたからである。ギッシングが労働者階級の特質をもっとも明白に示していると考え、作品中もっとも頻繁に描いている精神状態は、欲求不満の時に抑圧できず、突如として爆発させてしまう暴力的な怒りである。デリック嬢がマムフォード家で学ぼうとするリスペクタビリティ——例えば、中

産階級が得意とする「自分の性格を意識して偽装すること」（第六章）——を自家葉籠中の物にできるか否かは、ひとえに怒りの抑圧にかかっているのだが、それはいつも徒労に終わってしまう。『下宿人』の喜劇性を高めているのは、そうした人間の愚かな悪あがきである。

デリック嬢の最大の野心は、中産階級の家庭で行儀見習いをしながら、ビルトン氏のようなシティーに勤めるリスペクタブルな若者と結婚することであった。しかし、彼女はそうした野心を簡単に捨ててしまい、性的に魅力のある労働者階級の屈強な美男子、コップとの結婚を最終的に選んでしまう。結婚後に間違いなく暴力をふるわれるという確信がありながらも、「めっちゃ素敵な男に見える、そんな時がある」（第二章）彼から離れることができないのだ。そこには教育や環境といったものが労働者階級の女性にとって何の意味も持たないというギツシングの信念がある。ギツシングの最初と二度目の結婚相手がどちらも、性的な欲求を抑えられずに手を出してしまった下層階級の無教養で気性の激しい女だったことを考えると、それは実体験から生まれた信念だったと言つてよい。

* * * * *

ヴィクトリア朝では男女の性に関する表立った言動がタブー視されていたが、裏では売春や性風俗といった悪徳や乱倫が隆盛を極めていた。ギツシング自身の実生活で証明されているこ

とであるが、一般の人間が性的欲求を完全に制御できないことは、彼の作品では浅はかなリスベクタビリティの背後でしばしば暗示される。例えば『下宿人』のママフォード夫妻の場合を見てみよう。この夫婦には二歳になる子供がいるので新婚時代のような甘い雰囲気は感じられない。そのような状況で、お嬢さまが郊外のリスベクタブルな中産階級の家庭に下宿したがっているという新聞広告に、ママフォード氏が注意を引かれたことを考えてみると、「この新聞広告には同時に別の意味で彼の興味をそそるものがあつたのかもしれない」（第一章）と作者がほのめかしているように、ここには単なる金銭的利益とは異なる理由が読み取れる。ママフォード氏が中産階級にとって重要な隣近所に対する世間体を無視してまでも下宿人を置きたい別の理由とは何か。それは、彼が自己欺瞞的に言っているように、出勤して家にいない時に孤独な「妻が話し相手を持つこと」ではない。ママフォード氏はデリック嬢に「人を愛する能力がない」と分かっているにもかかわらず、「お嬢さまのことを好きにならずにおれなかった」し、「彼女の眼がなかなか脳裏から去らなく」（第五章）なっている。夫婦生活に倦怠感が漂う中で、若い美人と一緒に暮らしたいという彼の邪な願望を等閑に付することはできないだろう。

同じ下層中産階級でも若かりし頃のギッシングのように非常に貧乏しければ、街の女に手を出さずしかなく、実際に彼が最初の妻ネルから感染したように、そこには常に性病の危険があつた。上層中産階級の裕福な紳士であれば、「家庭の天使」としての妻とは別に、家から離れた秘密の世界で愛人／妾めかけをかこうことが当時は珍しくなかつた。事実、ディケンズは家庭の天使とは

言えない妻キャサリンと別居し、二七歳も離れた若い女優エレン・ターナンをかこっていた。ヴィクトリア朝における性的な道徳観は、同棲や不倫をした女性に対しては「家庭の天使」と逆の「堕ちた女」の烙印を押し、男性に対しては性的な自由を許すというダブル・スタンダードであった。マムフォード家に下宿するデリック嬢は若くて魅力的な美女である。ところが、彼女の下宿によって神聖な家庭生活が乱されて我慢できなくなったマムフォード氏は、「こんなことが長く続くようじゃ、ロンドンに下宿を借りたくなる」（第七章）と言っている。この発言から、単なる現実逃避の願望とは別に、別居による自由さと性的な自由さとの関係を読み取るのは牽強付会であろうか。

面白いのは、妻のマムフォード夫人にも、似たような願望が見られる点だ。デリック嬢が悪口を言った恋人コップの話の聞くと興味を覚え、お嬢さまは相手の欠点を誇張しているとか、「そんな悪漢であるはずがない」（第二章）とか、自己欺瞞的な思いに駆られ、この男に会つてみたいという願望を夫に吐露している。炭鉱夫の息子である猟場の番人に魅せられて子を宿す上流階級のチャタレー夫人のような、そんな実行力はマムフォード夫人には望めない。とはいえ、彼女は「嫉妬を超越できるほど理性的な人間」ではないので、夫に対するデリック嬢の影響力を感じた際には、「近くのテーブルに置かれた花びんから盛りの過ぎた花を何本か抜き始めた」（第六章）ように、その隠微な動きには性的な禁欲とフラストレーションが見え隠れしている。ギッティングはリスペクタビリティという名の検閲を通して下層中産階級の人々の滑稽

な、しかし心理的には非常に興味深い行為的表出を様々な形で描いてくれる作家である。

カルヴアンの神学思想から派生した英国のピューリタニズムの世俗内禁欲は近代資本主義社会の形成にとって原動力となったが、そうした中産階級の自己欺瞞的な禁欲主義は、抑圧的な性道徳、厳格な倫理観、上品ぶった偽善、拡張する国力から生まれる島国根性的なプライド・自己満足・楽天主義、そういった否定的な属性を内包しており、後世に「ヴィクトリアニズム」として批判されることになる。このような中産階級の偽善的な価値観や考え方を日常の生活で如実に示しているのが、外面と内面の乖離を生み出すリスペクタビリテイに他ならない。中産階級を扱ったギッシングの中期以降の作品群で、そうしたリスペクタビリテイが揶揄や軽侮の対象となり、もっとも喜劇的に描かれた小説が、この『下宿人』なのである。

二〇二四年立春 名古屋

松岡光治